

あいちゃんはいデオロギーの戦士

(ChocoFreak)

【1…すき家の出逢い】

●明転

あいちゃん中央平台板付き。泣きながらレジを打っている。

たか奥イン。レジで会計をする。

あい 「630円でーす。千円でよろしいですか？はい、370円のお返しでーす。ありがとうございますー」

たか 「・・・あの、どうしたんですか？」

あい 「？」

たか 「いや、あの、泣きながら、やってるから。」

あい 「・・・すみません！あ、商品に付着してました？」

たか 「ああ、いや、そんなの別に気にしてないんですけど」

あい 「あ、でも、この時間帯ワンオペだし、私キッチンも入ってたから、でもお客様
の頼まれた三種のチーズ牛井には」

たか 「大丈夫大丈夫！問題無かった、うん。すみませんね変なこと聞いちゃって

あい 「あ、そうですか」

たか 「じゃあ、ごちそう様でしたー」

たか手前ハケ。引き続きあいちゃんレジ打ち。

たか奥イン。レジで会計をする。

あい 「630円でーす。千円でよろしいですか？はい、370円のお返しでーす。ありがとうございますー」

たか 「あの」

あい 「？」

たか 「あ、うん、あー、その」

あい 「お客様、どうかされましたか？」

たか 「今日もワンオペですか？」

あい 「あ、はい。・・・今日も？」

たか 「前に、ほら、泣いてた時に」

あい 「あー！その節はすみませんお見苦しいところを！」

たか 「いやいや！とんでもありませんとんでもございません！」

二人 「・・・」

たか 「じゃあ、帰りますね、ごちそう様でした。」

あい 「はい・・・寒いので、お気を付けて！」

たか ニヤけながら手前ハケ。引き続きあいちゃんレジ打ち。
たか 奥イン。

あい 「630円でーす。千円でよろしいですか？はい、370円のお返しでーす。あ
りがとうございましたー」

たか 「今日もワンオペですか？」

あい 「はい」

たか 「キツイっすねー」

あい 「まあ私お金無いんで」

たか 「ああ・・・すみません何か」

あい 「いえいえ、良いんですよ。お客様も、いつもこの時間に来られますね。」

たか 「そうっすね、田舎だからここ位しか食べれる所無いし、でも自炊も出来ない
で」

あい 「しかも、絶対、三種のチーズ牛丼ですよ」

たか 「あれが一番美味いんですよ」

あい 「はは、ありがとうございます」

たか 「はい、どういたしまして？」

あい 「・・・ですかね？」

二人 「(ちょい笑)」

二人 「・・・」

たか 「・・・あ、じゃあ、また来るんで！ごちそう様でしたー」

あい 「あ、はい、ありがとうございますー」

たか 奥ハケ。引き続きあいちゃんレジ打ち。

あい 「今日もワンオペ、フツフツン」

酔っぱらったたか、ぼーちゃん奥イン。騒いでる。

ぼー 「あーすみません、ビール二つ」

あい 「はーい」

たか 「すみませーん」

あいちゃん奥ハケ

たか 「お前すげーな永遠に飲んでるじゃん」

ぼー 「もうね、現実がね、こう、もうね、嫌なんだよ俺はさ。飲んでないとやってらんない訳よ」

たか 「分かる、分かるぞお前のその気持ち、俺もね、久々にこっち帰って来て、この街の、寂れ具合も閉塞感も、だだっ広いだけの海とか、老人とどこぞの国籍か分からない出稼ぎ外国人しかうろついてないこととか、吐き気がするよね」

ぼー 「俺たちの知ってる故郷はもう、無い！。だからもうさ、俺はさ、この、街に？現実的に？引いては人生に？期待することを諦めたんだよね、疲れちゃったんだよ」

たか 「分かる、分かるぞお前のその気持ち」

ぼー 「ほんとかよ、ほんとに分かるのか、この、人生から、街から、何っーか、トキメキがゼロになってしまったこの喪失感」

たか 「分かるよ。その、いわゆる、トキメキ不足の喪失感から来る吐き気！」

あいちゃん奥イン

あい 「はい、いつもの心」(三種のチーズ牛丼を置きながら●何かトキメクやつ)

ぼー 「・・・ぼええええ(嘔吐)」

たか 「やばい、俺、トキめいてる。」

あい 「どうされました？」

ぼー 「ぼええええ」

たか 「好きです！」

あい 「あ・・・はい」

ぼー 「ぼええええ」

たか 「ちよと、ごめん」

二人舞台前方へ

●ぼーちゃん側暗め、二人側明るめ。

あい 「ちよと！私今ワンオペなんだけど！」

たか 「何で泣いてたの？」

あい 「？」

たか 「この前、俺が初めて話し掛けた時、泣いてたじゃん、一人で。いや、ワンオペだから一人なのは当たり前前なんだけどさ」

あい 「いや、別に、関係無いじゃん」

たか 「俺さ！だいぶ前に大学で東京に出てそのまま東京で就職して、なのに忘れた頃に親が倒れて病院に入れなきゃいけないくて、んで、東京の生活を捨てて仕方なくこっちに帰ってきて」

あい 「聞いてないんだけど！」

たか 「良いから！そんで、この前久々に帰って来たものの、何か、昔と変わっちゃったじゃん？この街。知ってる奴はみんな出てっちゃって、いるのはジジイとババアとどこぞの出稼ぎ外国人ばっかでさ、何か、嫌気さしちゃって。」

あい 「え、それとワンオペ中の私を連れてくるのと何の関係があるの？」

たか 「だから、うーんと、何っーか、その、同じ若者の涙とかさ、ここで流してること自体が凄く不自然で綺麗に見えたんだよ！・・・だから要するに、君の涙は綺麗で、何で泣いてたのかとても気になって、と同時に君も綺麗だ！」

あい 「・・・はあ？」

たか 「何て呼んだら良いかな？」

あい 「私？」

たか 「そうだよ、私以外に誰がいるんだよ！」

あい 「・・・あーい」

たか 「あい？」

あい 「うん。あいつって呼んで。」

たか 「あい、あいか、まだあいちちゃんの方が良いかな？」

あい 「どっちでも良いけど」

たか 「俺、たか、たかでもたか君でも良いよ、呼びやすい方で。」

あい 「たか・・・さん」

たか 「さんは、何か嫌だ」

あい 「じゃあ、たか・・・ちゃん」

たか 「うん、分かった、あいちちゃんでたかちゃんね。ごめんね、こんな無理矢理で。また会ってよ、客と店員ではなくてさ。そうだな、14日。2月の14日は空いてる？」

あい 「その日は、バイトの後なら」

たか 「じゃあ約束ね。バイトの後、会おう。」

☀二人側暗め、ぼーちゃん側明るめ

ぼー 「ぼええええ・・・けっ、ぺっ・・・あーー、スッキリした・・・何だったんだアイツ、ついぞ帰って来ねえな。」

ぼーちゃん立ち上がってフラフラ店内を見て回る。何かを見つける。

ぼー 「本日の、キッチン、ホール、レジ担当は・・・全員同じじゃんワンオペかよ。・・・何だこの名前?・・・まあいいや」

☀️ ぼーちゃん側暗め、二人側明るめ

たか 「じゃあ、約束ね、はい(小指を出す)」

あい 「？」

たか 「指切り、分かる？」

あい 「(困惑と照れの様子)」

たか 「絶対、会ってね」

あい 「うん」

☀️ 暗転

♪ 『Country boys & City Girls』 C1

【2…三人のそれぞれ】

☀️ 明転

舞台中央付近座って喋っているこうちんとぼーちゃん。ぼーちゃんはスマホに夢中。

こうち 「でき、やっぱり俺はさ、こう、下からガツンとね、かましてやるのが得意な訳よ」

ぼー 「うん。」

こうち 「でもね、何つーかさ、今の若者? つってもまだ俺も若者の部類だけでも。今の若者にはこう、下からガツンとやるさ、意識が弱い。いや、しゃーないんだよ時代が時代だし」

ぼー 「うん。」

こうち 「でね、ガツンとやってバクッと相四つ。これが出来なきゃいかんのよこれが出来なきゃ。やっぱりさ、そうすることで周りも盛り上がるってゆうかさ。そうゆうのあんじゃん? そう思わん?」

ぼー 「うん。」

こうち 「ほんとに思ってる?」

ぼー 「ん? うん、思ってる思ってる」

こうち 「でしょ? 思うっしょ? でもさ、こう。俺の見る理想のビジョンと世の中がこう、いや、立会いの変化を否定すること自体が悪いことなのかもしれないけどもさ、うーうーん、難しいよね。これについてあなただったらどう思う?」

ぼー 「うん。」

こうち 「いや、うん。じゃない。」

ぼー 「うん？」

こうち 「うん？でもない。」

ぼー 「あーごめんあんま聞いてなかったわ」

こうち 「ぼーちゃんさ、そうゆうところ。俺何回も言ったよね、人が話してる時にぼーっ
としすぎ。注意がてらあだ名をぼーちゃんにしたけど本当にぼーちゃんだよお
前。鼻水垂らすか？」

ぼー 「ごめんごめん、あの、話がとっ散らかり過ぎてマジで分かんない」

こうち 「俺の話聞いてた？」

ぼー 「多少はね、でも聞いてたところできさっぱり過ぎて諦めてチャリ走ってたよ」

こうち 「だから、何故俺が、角界から去ったのか。」

ぼー 「え？」

こうち 「え？って何だよ」

ぼー 「いや、え？だって、全部はしょってんじゃん。いつから角界入りしてたんだよ
聞いてないよ先ず。いや薄々勘づいてたよ相撲の話をしてるんじゃないかっ
て。例えば話とかだと思ってたからさ」

こうち 「角界入りしたのは、高校卒業して直ぐくらいかな。」

ぼー 「それ、それ、知らないもんそのこうちんの角界入りエピソード、てかおっそいな
あよくそのタイミングで角界入りしたなあ」

こうち 「ぼーちゃんがぼーっとしてる間にね、色々あったんだって、ぼーちゃんはぼーっ
とし過ぎて取り残されがちじゃん？俺はね、その時その時を一生懸命に生きて
るんだよ。お前には分からんだろうけど、やっぱり泥臭く一生懸命に生きる姿こ
そロックだと俺は思うんだよね。」

ぼー 「あーほら！またとっ散らかした。いつ誰がロックの話を出したんだよ」

こうち 「何言ってるんだよ俺らはいっだってロックだろ！忘れちゃったのかよあの青春の
日々を！」

ぼー 「いや俺たちがロックかどうかじゃねーんだよ！」

たかイン

たか 「おいっすー」

こうち 「あ、たか」

たか 「おいたか、聞いてくれよ、こいつもうロックは捨てたんだってよ！」

たか 「何？またとっ散らかってるの？」

ぼー 「とっ散らかり祭りだよ」

たか座る。全員一息つく。

たか 「あ、あけおめ」

こうち 「おおお、あけおめあけおめ(的な会話) え、何?しばらくはずっとこっちに
いんの?」

たか 「まあ親の状況が状況だし、そのつもりかな」

こうち 「あれ?ぼーちゃんは、そのこと知ってたん?」

ぼー 「あ、うん、この前会って聞いたよ」

こうち 「え、もう会ってたの?」

二人 「うん」

こうち 「何!?俺のことほっぽって二人でイチャコラしてたの!」

ぼー 「あ!イチャコラで思い出した!お前あの後どうしたん?」

たか 「いやあ〜」

こうち 「え、何あの後って?」

ぼー 「こいつさ、俺が壮絶な胃もたれで吐いてる横ですき家のバイトの子ナンパして
んのよ!」

たか 「お前あれは胃もたれじゃなくて只の酔っ払いだろ」

ぼー 「いや!違うね!三種のチーズ牛井といらんトキメキションを同時に見せられた
ことによる胃もたれだね!」

たか 「いらんトキメキションとか言うなよお前、こう見えても一世一代の勇気振り絞
ったんだから」

ぼー 「酔っ払ってちよつと強気になってただけだろ!」

こうち 「あーーッ!!・・・話に混ざりたいッ!!」

ぼー 「(無視) え、で結局どうなったん?ちゃんと会ったん?」

たか 「・・・会ったよ。ちゃんと約束して、その日に」

ぼー 「マジかー!良いな羨ましいな!え、で、何?今はその、どうゆう状況なの?」
たか 「どうゆう状況もこうゆう状況もないってゆうか・・・まあ、付き合ってるよ
ね」

こうち 「え?え?たか彼女出来たの?」

ぼー 「(無視) うわ展開早いなそれは引くわ・・・」

たか 「あ?お前引くのはナシだろ自分から聞いたって!」

ぼー 「ごめんごめんそんなガチになんよ」

こうち 「(話に入らず暇になり四股を踏み始める)」

たか 「いや別にガチじゃないけどさ、ほら、俺あんま経験無いからさ」

ぼー 「あー、そうだね、あんまたかのそーゆう話聞かないもんね。え、東京じゃそーゆうこと無かったの？」

たか 「うん、無かったね悲しいことに。だからさ、地元帰ってきたらもつとそーゆうの無さそうだから危機感ヤバかったけど滑り込みセーフかな」

ぼー 「ムカつくなあ俺なんてトキメキがさっぱり枯れ切っちゃまってカッピカピだよ」

たか 「まあ俺はみんなとまたロックがやりたいよ（たかにぶつかる）」

ぼー 「こいつ何言ってるの？」

こうち 「マジで分かんない」

二人 「だからさ、俺がこうして、今日みんなをうちに集めた理由だよ」

こうち 「みんな聞いてるとそうじゃん？みんな、この街に対しての不満が多いじゃない？そーゆうのそのままにしても鬱屈としてくだけじゃん？だって、見ろよこいつの死んだ様な顔（ぼーちゃんを指差す）」

ぼー 「俺？」

こうち 「そうだよお前だよ、ずっと死んだ様な顔でチャリ走してんだろ？」

ぼー 「え別に良いじゃんチャリ走好きなんだよ」

こうち 「死んでんだよ！コンテンツとして！とつくに死んでんだチャリ走なんてのは！地元の友達がさあ、死んだ様な顔して死んだコンテンツを取り憑かれた様になってるさまはねえ、こたえるものがあるんだよ！」

たか 「お、おいやめろよトップランカーなんだから」

こうち 「お前もさあ！キラキラした生活に憧れて東京に行ったは良いものの、逃れられない理由で万有引力の様に戻って来た訳じゃん？」

たか 「お、おう・・・」

こうち 「そんでお前、どこの誰か分からん女とこの先夢も無く生きていくの？違うでしょ！それは！違うって自分でも思ってたんだろ？」

ぼー 「ちよいちよいそれはさあ、今言うべきじゃないっしょお」

こうち 「いーんだよどうせブスなんだから！あのね、俺はこの街にはブスしかいないってもう随分前から知ってるの！ブスとこんな、東京で洗われても相変わらず芋臭い奴との恋愛なんて毛ほども興味無いんだよ！」

たか 「ちよ、お前、ブスはないじゃん！ブスじゃないもんねえ？」

ぼー 「ん？あ、ごめん酔って覚えてないや」

たか 「は？ちよ、おま、えーおま、え？」

こうち 「どうせブスだよー！分かるもんねー！俺にはー！だから興味無いもんねー！」

ぼー 「ねえこれちよつと僻んでんじやない？」

たか 「僻んでるよね？僻んでるよね？」

こうち 「僻んでないよお！ブスと芋の恋愛なんか、僻んでないよお！」

ぼー 「たか、僻まれてるよ」
たか 「えー、お前、おいしく、羨ましいのかよお前素直にそう言ってお前
い〜」
ぼー 「お、惚気か？惚気話来るのか？」
たか 「さっきも言ったけど俺あんま経験無いからさ、どう惚気たら良いのか分からな
いんだよね。教えてよぼーちゃん」
ぼー 「いや、俺はもうゴビ砂漠の様に枯れ切ってるから、こうちんの方がそーゆうの
得意だよ」
こうち 「・・・え、何？」
たか 「ちよつと惚気てみて」
こうち 「・・・惚気ようと思って惚気るのめっちゃハードル高くない？」
ぼー 「良いから頑張れよ。話に混ざりたいんだろ？四股踏んでねーで惚気ろよ」
こうち 「ええ、無茶苦茶だろその振り。ちなみに俺セックスはするけど恋愛はしない主
義だし」
ぼー 「とんでもない主義だな」
たか 「あ、待って、いける、いける、惚気話出てきそう」
こうち 「そんな感じで惚気話出てくんの？」
たか 「逆チョコをね、したのよ」
ぼー 「ほう」
こうち 「ほう」
たか 「バレンタインの日にね、会う約束して、彼女のバイトの後。んで、逆チョコ大
作戦」
こうち 「なかなかあざといことするね、君」
たか 「そうかな？」
ぼー 「手作り？」
たか 「手作り」
二人 「おおー」
こうち 「料理男子な一面を見せた訳だな。素晴らしい」
ぼー 「んで？」
たか 「んで、まあ、そのまま流れというか」
こうち 「立ち合いは強めで、そのまま流れで寄り切ったのね」
ぼー 「なるほどね、下からガツンとね、立ち合いから食らわせたよ」
たか 「ん、まあ何かよく分かんねえけど」
こうち 「こいつ横綱だわ、恋の横綱。良いねそうゆう若者が今はほら、いねーじゃんこ
の街に、だからこそ俺はロックで盛り上げたいって思ってた、だから今日二人
をうちに呼んだんだだけさ」

ぼー 「ごめんごめん不用意に乗った俺が悪かった。良いよたか続けて、で流れでどうしたん？」

たか 「まあ、流れで、チョコで空気は良くなったから、このまま飲みますかってなっ
て。」

こうち 「あー、いよいよ土俵入りだね」

たか 「んでまあ、時間も時間だし、彼女がさ、じゃあウチで飲みましようって」

ぼー 「なかなか積極的だね」

こうち 「料理出来ますアピールが効いたのかね」

たか 「そんでまあ、彼女の家で宅飲みをすることになって」

ぼー 「あーこれはいよいよ土俵入りだわ」

こうち 「回しを取って土俵際のくんづほぐれつの攻めぎ合いということか」

たか 「まあそこはさ、順を追うというか、ワイン飲みつつアテとか作りつつ映画とか
見つつ」

こうち 「料理出来ますアピールから丁寧な押し合いへし合いで恋の土俵に引き込んだと
いうことか」

ぼー 「これはあつい肉のぶつかり合いだわ」

たか 「・・・ごっちゃんです！」

二人 「おおー！（何か盛り上がる）」

こうち 「最高のぶつかり稽古だね！最高のぶつかり稽古だね！」

ぼー 「決まり手は？決まり手は？押し出し？寄り切り？」

たか 「・・・まあ、強いて言うなら、下手投げかな？」

二人 「うおー！（盛り上がる）」

たか 「とまあそのまま寝て翌朝、俺が仕事行くからって先に家を出ただけど、また
会おうね、って。チョコはお返しするからね、って」

二人 「・・・ふうむ（盛り下がる）」

たか 「・・・え？」

ぼー 「何か普通に惚気られるとムカついて来るわ」

こうち 「せっかく盛り上がったのに何か落ち着いちゃったわ」

たか 「・・・まあそっからは惚気るのも憚れるくらいのイチヤイチャを今日まで続け
てますよ」

こうち 「俺はこんな話があったんじゃない（小声）」

ぼー 「え？」

こうち 「俺はこんな話があったんじゃない！」

二人 「おおおどうしたどうした」

こうち 「何故俺がこんな芋の恋愛漫談を聞かなきゃなんないんだ！」

たか 「ええ〜ノリノリだったじゃん・・・」

こうち 「満たされてるんじゃないよ！色恋で！マジ下らない！どうせ別れるんだよ！」

ぼー 「それはそうだったか、どうせ直ぐ別れる。」

たか 「酷いなお前らいきなり」

こうち 「俺はねえ、みんなに取り戻して欲しいんだよ！思い出せよ高校の頃、三人で音楽でテッペン取ろうぜってバンドやったじゃんかよ！」

たか 「・・・そんなことしたっけ？」

ぼー 「文化祭限定のバンドな、お前盛り過ぎだよ」

こうち 「そうだったかもしれない！そう言われてみればそうだったかもしれない！でもさ、アツかったじゃん、あの頃。だから俺はね、俺たちの音楽でこの街を変えたいんだよ」

たか 「またバンドやりたいってこと？」

こうち 「そう、つまりそれ」

たか 「ぼーちゃんどうする？」

ぼー 「んー、何か怠い」

こうち 「お前マジかよ！チャリ走やってるうちに年食って死んじまうぞ」

ぼー 「んー、何かそれでも良いかなって」

こうち 「はあ？お前は？たか。」

たか 「ぼーちゃんがやりたくなったらやるよ。二人だけじゃ面白くないし。」

ぼー 「こうちはさ、金持ちこうちだから出来るんだよ。何か色々商売やって上手い事いってんでしょ？」

たか 「そうなの？」

ぼー 「いや俺も噂にしか聞いてないけど、この際どうなのかなって」

こうち 「まあこう言うのもなんだけどお金には困ってないよ。」

ぼー 「俺はさ、高校卒業してからずっとフリーターだから、金無いのよ。バンドやりたかったらもっと稼がなきゃでしょ？その為にバイト増やすのも面倒いしね、こうちに養ってもらえるなら良いけどさ」

たか 「俺も、親の事で病院とか行かなきゃだし、仕事もあるから時間的に厳しいと思うんだよね」

こうち 「やりたい気持ちは？ゼロ？」

たか 「いや、そりゃゼロではないけどさ。」

こうち 「ゼロじゃないならさ、やろうよ！突飛な話かもしれないけどさ、こいつがこうなっちゃったのもこの街の活気の無さ、ってゆうかさ、ジジイとババアと出稼ぎ外国人しかいなくなって若者がみんな出てって、そりゃこんな死んだ様な顔になるよ普通。どうにかしたいじゃん？どうにかするべきだと思うでしょ？」

三人、しばらく沈黙。

ぼー 「まあ、俺は何でも良いよ、応援はするからさ、後は頑張るな」
たか 「帰る？」
ぼー 「タバコ」

ぼーちゃん奥ハケ

たか 「俺もちょっと、電話」
こうち 「大丈夫だよ」

たか 「？」

こうち 「アイツはやるから、絶対。そーゆう奴だから。」

たか 「養うの？」

こうち 「金で解決出来たら楽だけどね。まあ何とかなるさ、大丈夫。」

たか 「頑張ってるのな」

こうち 「やりたいことやってるだけだから」

たか 「はは、凄いじゃん、じゃあ電話してくる」

こうち 「俺もちょっと仕事の電話してくる」

たか 「ん。あ、もしもし、俺、ただけど」

たか喋りながら奥ハケ、見送ってこうちん手前ハケ

【3…あいちゃんとみんなの事情】

あいちゃん手前イン、中央平台へ。電話している。

あい 「うん、うん、今どこにんの？友達んち？そっかじゃあこれからは会えない？
チヨコお返しするから、ええ〜そっかあ残念。会いたかったのに、じゃあ遊び
終わった後は？ちょっとで良いからさ。え？何？今日も土俵で下手投げでの
こったのこった？何言ってるの？うん、じゃあ予定分かったら教えて、合わせ
てウチ出るから。うん、じゃあね」

一息つく。

♪玄関チャイム

あいちゃん奥ハケの方へ。みほと水島と奥イン。平台上で三人座る。

みほ 「で、何、あんたお店やめんの？」

あい 「はい」

みほ 「男？」

あい 「・・・違います」

水島 「(インしながら) この感じ絶対男だよ」

みほ 「そうだね。ねえ、あんたさ、ウチが人足りてないの知ってるでしょ？それなのに男が原因でやめるってどうなの？他の女の子達に示しが付かないと思わないのかい？」

あい 「そんなこと言われても、そもそも男じゃないですし、他のバイトも忙しくなってきたから両立は難しいかなって」

水島 「みほちゃん、やっぱこの感じ絶対男だよ。嘘ついてるよこの子。」

みほ 「そうだね。ねえ、あんたさ、すき家でもバイトしてるんだろ？でも給料安いだろ？ウチはあんたの働きっぷりを見てこうして引き留めてんのよ。残ってくれたら給料上げるよう店長には私から言っとくからさ」

あい 「先輩がそう言うから長いこと続けてきましたけど、結局上がった試しが無いじゃないですか。」

水島 「みほちゃん、この人お給料と男のことしか頭に無いんだよ、ムカつくね、可愛い顔してこーゆうことばっか言う女の子俺一番嫌い。」

みほ 「そうだね。ねえ、あんた、給料の話を出すのは性格が悪いんじゃないかい？この不景気なご時世、どこ行っちゃって大して貰えないんだから」

あい 「給料の話出したのは先輩じゃないですか。それに私、知ってますからね。店長が私たちの給料ピンハネしてるってこと、先輩がそのお零れ貰ってるってことも」

みほ 「そんなの今この場所です話じゃないじゃないか！」

あい 「じゃないじゃないかじゃないです！この際言わせてもらいますよ！先輩、店長と関係があるでしょ？それでお金貰ってる訳じゃないですか。それなのにウチまで来て男が原因でどうか給料が原因でどうか、自分のこと棚に持ち上げ過ぎじゃないですか？」

水島 「・・・みほちゃん、それは本当なのかい？」

みほ 「そうだね。ねえ、あんたさ」

水島 「すみません！お手洗いを借りてもよろしいでしょうか！」

あい 「そもそもあなた誰ですか!？」

みほ 「旦那よ」

あい 「はあ!?・・・知らずに色々喋っちゃいましたけど」

みほ 「良いのよ別にあのMだから。元は私のお客さんなのよ、今は店長に雇って貰って色々雑務してるけど。だから大体のことは許してくれるのよ」

あい 「いやちょっとそれとこの話はだいぶ違うと思うんですけど」

みほ 「良いのよ別に。私が誰とやったところであの人への愛は変わらないから、こんな浮気のうちに入らないわ」

あい 「そうですか」

みほ 「それに家計が厳しいのはあの人も知ってるから、むしろ感謝されて然るべきなのよ」

あい 「凄いですね、お互いに信用し合ってるんですね」

みほ 「そんじよそこらのカップルとは成り立ちから違うからね。」

水島 「すみません！あの！電気はどこですか？（ハケ裏から）」

あい 「はいはい」

あいちゃん携帯を置いて手前ハケへ。

みほはいなくなった隙に携帯を見る。みほ「ふうん」とか言ってる。

あいちゃん戻ってくる。

あい 「あの、泣いてましたよ、旦那さん。真っ暗なトイレで」

みほ 「ほっとけば良いのよ」

あい 「そうですか・・・あの、それで先輩、私気持ち変わらないですよ。」

みほ 「あんた、やっぱり男じゃないの？」

あい 「だから、違いますって。」

みほ 「着信、来てるわよ。いっぱい」

あい 「ちょっと勝手に見ないで下さいよ」

あいちゃん携帯を見て固まる。

みほ 「店長から。あんたやっぱり店長と何かあったのね。」

あい 「先輩には関係無いです。」

みほ 「ヤってたの？」

あい 「先輩には関係無いです。」

水島 「ふううううう（大きな泣き声）」

あい 「ほら、泣いてますよ。」

みほ 「ほっとけば良いのよ。そのうち越えるから。」

あい 「越える？まあ良いですけど。何言われても私、あの店に残るつもりありませんから。先輩たち居るだけ無駄ですよ」

みほ 「堅いわね。店長との関係、はつきりさせとかなないと後々後悔するわよ」

あい 「どうしてそこをそんなに詮索するんですか？何度も言ってるけど、先輩とは関係の無い話じゃないですか。（水島の泣き声）それと近所迷惑だから何とかしてもらえないですか？」

♪携帯の鳴る音

あいちゃん携帯を見てまた固まる。

みほ 「出たら？」

あい 「・・・もしもし。」

こうちん奥ハケより電話しながらイン

こうち 「あ、やっと出た。もう出てくれないと思ったよ」

あい 「店长、もう私辞めたので」

こうち 「何よよそよそしいなあ、二人で会ってた時はもっと女の子な感じなのにね！」

あい 「店长その話は」

みほ 「やっぱり何かあるんじゃない」

こうち 「あれ？みほちゃんもそこにいるの？何だ話が早いや。てことは？」

水島 「ふうふううう（大きな泣き声）」

こうち 「あーやっぱり旦那さんもいるんだね」

あい 「店长、あの、何のつもりですか？」

こうち 「あいちゃんさあ、ちょっと強引過ぎない？喧嘩してから一度もお店顔出してくれないじゃない。」

あい 「もうやめたので」

こうち 「ほら、強引だなあ。あいちゃんがそんな強引なら、こっちもそれ相応に強引にいくよ？」

あい 「どうゆうこと？」

こうち 「みほちゃんとその旦那さん、俺がけしかけたんだよね」

水島 「んあっ！（何かを越える声）」

みほ 「越えたね」

こうち 「ちゃんと会って話出来てないからさ。多少強引だけど、その二人に連れて来るように頼んだから。」

あい 「え？ちょっと待ってよ私これから予定があるのに！」

みほ 「じゃあま、そーゆうことだから（立ち上がる）」

あい 「え!？」

こうち 「じゃ、また後で、会えるの楽しみにしてるから」

あい 「え!？」

水島 「一周回って、寝取りプレイに目覚めてしまいました。」

あい 「はあ!？」

こうち 「あ、言い忘れたけど、みほちゃんの旦那さん、元力士だから、人を持ち上げる
ことと運ぶことは得意だよ。だからあんま抵抗しない方が良いよ。じゃ。」

こうちん電話を切り奥にハケる。あいちゃんを力づくで運ぶポジションな二人。

あい 「え何この状況」

水島 「みほちゃん、この子んちの台所、チョコ作ってたよ。やっぱ男が嘸んでるよ」

みほ 「新しい彼氏作って店長と別れて気まずいから店やめるってことなのね？舐めら
れたモンだわ」

あい 「いや、ほんとに、それだけ聞くと私が凄く悪いみたいだけど、店長がみんなか
らピンハネしてるの許せなかったし、私はそれを知ったからやめただけで」

水島 「じゃあチョコ食ってええんか!?チョコ食ってええんか!?!」

あい 「それは、それはやめて欲しい・・・私この後予定あるし、あのチョコも人に渡
すものだから、今は店長の家に行けないしチョコも食べさせられない」

みほ 「あんま生意気言うんじゃないよ!」

みほ、隠し持ってた鞭やら首輪やらを取り出す。水島、服を脱ぎだす。下はふんどし。

みほ、水島が脱いでる間に鞭でぺちぺち叩く。

みほ 「あんたは今日、大切な人に会えないしチョコも渡せない。店長の所に行って女
の盛りが過ぎるまで働く契約をしろらうよ!」

水島 「逃したら俺たちも土俵際だからね、悪いけど寄り切らせてもらおうよ!」

あい 「あんた達に捕まるのは、何だか絶対に嫌だ!」

あいちゃん手前ハケへ逃亡、追う二人。

【4：すれ違い】

たか、ぼーちゃん奥イン。

たか 「ぼーちゃん今バイト何やってんの?」

ぼー 「塾講。」

たか 「塾講!?嘘だろ!?先生!?お前みたいな死んだ顔したやつが未来ある子供たちにモ
ノを教える良いのかよ」

ぼー 「そうだよな、死んだ顔かどうかはともかく、俺高卒で大した学も無いのに、マ
ジで人手不足なんだろうな」

たか 「生徒は?高校生?」

ぼー 「いや、小学生。さすがに高校レベルは無理だ」

たか 「だよ、えーあのぼーちゃんが塾講ね。めっちゃ先生に生卵とか投げつけてたあのぼーちゃんがね」

ぼー 「あー、あったなあそんなこと。．．．爆竹も投げたなあ」

たか 「投げてた投げてた。気に入らない先生がいるとき、こうちんと二人で生卵とか爆竹とか投げてた」

ぼー 「近くの牧場から連れてきた牛を先生に向けて放ったりね」

たか 「やってたやってた、楽しかったなあ、あの頃の二人はほんとにアナーキーでロツクな感じだったわー」

ぼー 「こうちはあの頃から抜け出せてないけどな」

たか 「ほんとなー。でも、変わったよこうちんも、悪い意味で知性を身に付けた感じ。」

ぼー 「そうだな、てかアイツ何やってんの遅くない？」

たか 「何か、仕事の電話がって。」

こうちん 手前イン。酒を持ってる。

こうち 「ごめんごめん遅くなった。みんな飲むっしょ？」

ぼー 「まあ明日遅いし、たかは？」

たか 「んー、俺はあとちょっとしたら帰ろうかな。」

ぼー 「彼女？」

たか 「バレたか」

こうち 「じゃあたかはソフドリだね、はい、かんばーい」

二人 「かんばーい」

乾杯する三人。

三人 「．．．．．(長い)」

こうち 「え、何この無音の空間」

ぼー 「いや、何か」

たか 「話し尽くしちゃった感」

ぼー 「昔はこうだったねー、以外に話す事が無くなってしまった」

三人 「．．．」

ぼー 「ごめん俺チャリ走するわ」

たか 「え、ずるい、ずるくない？」

ぼー 「ごめんな俺トップランカーだから」

たか 「ずるいずるい俺も気を紛らわしたい」

こうち 「・・・死んでしまった」

たか 「え？」

こうち 「みんな死んでしまったんだよ！」

たか 「は？」

こうち 「だから、かつてのさ、アツかった俺らは死んじまって、今現在を何の熱意も無

く過ごしてるから！今で語り合えないんだよ！そんなの生きてないだろ！な

あ、そう思うだろ？」

ぼー 「繰り返しな！・・・ずっとこの繰り返し。さっきも似た様な話したよな？俺に

熱意が無いたかに熱意が無いつて、そんでお前が一人で空回りしてるこの構図
な！ずーっとこの繰り返し！飽きてんだよねとっくに！」

こうち 「そうだよ繰り返しだよ！俺はお前らと違ってダラダラ過ごしてる訳じゃなくて

ちゃんとしてるからさ！店経営したり副業やったり、この街を変えようって音
楽やろうとしてたり、そうやって生きた方がずっと良い事知ってるからさ、だ
からこうしてお前ら呼んで話してんじゃん、大事だからさ！お前らが！」

ぼー 「それが恩着せがましいんだよ！俺は今の生活で充分満足なんだよ！お前から見

て死んでもこっちは必死で生きてんの！」

「俺はさ」

「？」

たか 「俺はお前らといると楽しいけどな」

二人 「・・・」

ぼー 「ちよちよちよちよ待って、ちよちよちよちよ待って、何たかいきなり自分
ワールド全開にしてんの？AB型なの？それだと話が変な方にすり替わっちゃ
わない？」

「AB型だよ」

たか 「あ、マジでAB型なのか、くっそお油断した」

たか 「こうちん」

こうち 「ん？」

たか 「俺ちよっとロックやりたくなってきたわ」

こうち 「マジで？」

たか 「うん、何か、俺だつてこの感じ嫌だしさ。今、頑張ってるんだつてこと、見つ
けたいなって思ったし。まあ仕事とか両親とか・・・彼女とか。色々あるから
時間作るの難しいかもしれないけど、やってみようかな。」

こうち 「マジで!?え、めっちゃ嬉しい！うわ、何か、頑張ろうねよろしく！」

たか 「よろしく(固い握手)」

こうち 「お前は？どうする？」

ぼー 「え、嘘、お前らマジ？」

二人 「(見つめる) どうする？」

ぼー 「うわ！同調圧力！」

♪携帯の鳴る音(二人同時)

こうたか 「あ、電話だ(電話出る)」

ぼー 「助かった」

みほ電話をしながら手前イン。あいちゃん電話をしながら奥イン。

たかこう 「もしもし」

あい 「たかちゃん！」

みほ 「店長！」

たかこう 「どうした!？」

みほ 「取り逃がしたわ」

あい 「追われてる！」

こうち 「何してんの！」

たか 「ど、どゆこと！」

みほ 「窓から逃げられちゃった、まだ近くにいるはずだから」

あい 「家に変な人たち押しかけてきた！助けて！」

こうち 「旦那さんは？」

水島、首輪に繋がれた状態で四足歩行で手前イン

水島 「ニオイ、スル、コッチ」

みほ 「今匂いを辿ってるわ」

たか 「と、とりあえず、今どこにいんの？」

水島 「アマイ、アマイ、イイニオイ、コッチカラ、スル！」

こうち 「今どこにいる？」

みほ 「ほら！早く見つけて！（水島を鞭で叩く）えっとね二丁目の交差点の近く。」

あい 「(キョロキョロしながら) えっと・・・二丁目の交差点・・・の看板の裏？」

たか 「ごめんよく聞こえない」

あい 「二丁目の交差点の看板の裏！」

たか 「二丁目の交差点の看板の裏!？」

こうち 「二丁目の交差点の看板の裏!？」

たか 「え!？」

こうち 「え!？」

みほ 「二丁目の交差点の看板の裏!？」

水島 「アッチダ!」

たか 「じ、じゃあ行くから!そこで待ってて!」

あい 「うん!」

ぼーちゃん、何かを悟る。

たか 「ごめん、何か、彼女大変そうだから、俺行くね!」

ぼー 「お、おう」

たか奥ハケ。

こうち 「捕まえて連れてきたら、みほちゃんの給料、凄く弾むよ!」

みほ 「店長のそういうところ、好きよ」

水島 「ふおおおお!」

水島とみほ奥ハケ。あいちゃんキョロキョロしつつ手前ハケ。

こうちん電話を切る。

こうち 「・・・わりいわりい!飲み直そうか!」

ぼー 「・・・うん」

こうち 「どした?」

ぼー 「いや、お前、何してんの?」

こうち 「え?」

ぼー 「さっきの、電話」

こうち 「ああ!仕事仕事!忙しいんだよね俺!ごめんね!」

ぼー 「・・・そっか。大変だな」

こうち 「そうなんだよ大変なんだよ!なあ聞いてくれよ、ぼーちゃんはぼーっとしてるしどうせ今話しても明日には忘れちゃうだろうから言うけど、ウチの店の女の子に逃げられちゃってさ!ちよっと店長!私たちの給料ピンハネしてるでしょ!許せないんですけど!って。そりやするっつーの!」

ぼー 「そりやするんだ」

こうち 「そうだよ!何かねー、優しくし過ぎちゃったのかねー。思い込み激しいんだろ
うなあ今の子たちは。給料上げて下さいってゆうからさ!じゃあ言う事聞いて

ねって、抱こうが何しようが言う事聞いてねって、泣きながら逃げてっちゃったけどさ、泣いて逃げてでも連れ戻しますよって、そーゆう話だろ!？」

ぼー 「んー、まあ俺はよく分からんけど」

「結局どこにも身寄りの無い外人なんか体売るしかないんだからさ!そーゆうことなんだよ!こっちだって好きでそんな子たち使ってるんじゃないの!若い子なんてどこぞの国籍とも知らん外人しかいないじゃん!今、この街には。感謝して欲しいよねーそーゆう子達いっぱい雇ってるんだからさ!そう思うだろ!？」ぼーちゃんも」

ぼー 「まあ、そうなのかな?分かんねーけど」

こうち 「はは!相変わらずぼーっとして何も分かんないねぼーちゃんは!簡潔にまとめて話さないと理解出来ないかな?」

ぼー 「うん、まあ、お前の話は特段分かり辛いからね。でも何となく分かったよ」

こうち 「あ、そう!」

ぼー 「外人の女の子で安くこき使ってるんですよ。ピンハネして金持ちこうちんで、しかもバレたら手出して金ちらつかせて、逃げられたら捕まえて。そりゃあ大変だわ。」

こうち 「分かってくれるよな!大変なんだよ!まあ、世の中が悪いよね、世の中が!だからさ、そんな世の中に俺は下からガツンとロックで食らわせたってことなんだよね要するに。」

ぼー 「うん、分かったよ。やっぱすぐえわお前、俺には出来ないことめっちゃしてるもん、俺には関係無いけど。凄いと思うよ。」

こうち 「おいおい!褒めても何も出ないぞ!まあこういった秘めたる激情はロックで解放しよう。この街に、活気を取り戻す為に、捨てていった奴らの心に炎を!後からやってきて我が物顔する奴らに鉄槌を!アツイ心に乗せて一緒に歌おうぜ!」

ぼー 「・・・たかの言ってた通りだわ。お前何も変わってねえのに、悪い知性だけ身に付けっちゃったんだな」

こうち 「え!?どゆこと!?もしかしてデイスってる!？」

ぼー 「・・・いや、別にデイスっちゃいないよ。」

こうち 「あはは!ビビったー!やっぱ俺たち三人、最高の友達だよな!こんなに俺の大変さ分かってくれる奴いねーよ!やっぱお前らのこと大事だよ!」

ぼー 「・・・そうだね、俺も大事だよ」

♪ 劇場照明&曲C I 『Chelsea dagger』

ぼーちゃん、こうちん手前ハケ

【5…幸福の黒い海】

あいちゃん、みほ、水島奥イン。平台上へ。

●場転照明&曲F O

みほ 「とうとう追い詰めたよ」

水島 「みほちゃん、チョコの甘い匂いを辿ったら見つけたよ。俺凄いだろ？」

みほ 「そうだね。あんた、店長に居場所がバレてるんだから、もう逃げられないわよ。」

あい 「やっぱりバレてたんですね。警察に言います。店長も先輩たちももう完全にアウトですからね、言い逃れ出来ませんよ。」

みほ 「馬鹿ねあんたは。この街の警察があんたたちを助けられると思う？」

あい 「どうゆうこと？」

みほ 「この街の警察はね、・・・全員がシルバー世代よ。少子高齢化の煽りを受けて全員が腰の曲がった70代だわ」

あい 「そんな」

水島 「狂ってるね」

あい 「みほ先輩、・・・こう言うのも何ですけど、みほ先輩はこれで良いんですか？」

みほ 「何よ」

あい 「お金ちらつかせられて、旦那さん共々店長に良いように使われてませんか？」

みほ 「しょうがないでしょ」

あい 「旦那さんも！奥さんが良いように使われてて、その上諦めきってて。そんなに良いんですか？」

水島 「我が家の経済は店長にどっぷり依存してるからね！頼まれた仕事をやるだけさ」

みほ 「あんた」

水島 「何だいまほちゃん」

みほ 「そうゆうところ、かっこいいわよ」

水島 「くうううう！」

あい 「どうかしてるよ」

みほ 「あんまり知った口聞かないでくれる？（鞭で水島を叩きながら）私たちには私たちの愛があるの。私が何しようと思えば旦那が何しようと思えばそれで良いのよ。それが難しい世の中かもしれないけど、自分たちで選んだことだから、あんたにとやかく言われる筋合いは無いわ」

水島 「厳しい時代に合わせて自らの性癖をアップデートすることなんて訳ないのさ」
あい 「理解出来ない」

みほ 「理解出来なくて当然、所詮他人は他人。だからもう観念なさい。あんた。」
水島 「ああ、信じられるのは！自分のおちんちんだだけだ！うおおおおお！（掛け声と共に張り手をしながら突進）」
あい 「うわ！（避ける）」
みほ 「（鞭で水島を叩く）」
水島 「うおおおおお！（張り手突進）」
あい 「うわ！（避ける）」
みほ 「（鞭で叩く）」
水島 「うおおおおお！（張り手突進）」
あい 「うわ！（避ける）あ、思ったより動きが簡単だ！」

同様の流れを繰り返す。たか手前イン。

たか 「・・・何だあいつら・・・」
あい 「あ、たかちゃん！」
たか 「あいちゃん！」
水島 「隙ありいいいい！（チョコを奪う）」
あい 「あ！」
水島 「みほちゃん、おいしそうなチョコだね、一緒に食べよう（食べ始める）」
みほ 「あんた趣旨変わってるわよ！（とか言いつつ食べる）おいしいわね！」
たか 「今のうちに逃げよう！」
あい 「あ、でもチョコ！」
たか 「良いから！」

たか、あいちゃんの手を引き強引に手前ハケ。

みほ、水島何かごちゃごちゃしながら手前ハケ。

♪波の音

●変化。前面へ

しばらくしたらたか、あいちゃん奥インし前へ。

たか 「・・・ごめんね、怖かったね」
あい 「・・・たかちゃんに渡す予定だったチョコ、取られちゃった。」
たか 「あ、ああ良いよ別に！そんなことより無事で良かったよ！」
あい 「（ちよつと睨んだ後、端っこに行つてちよこんと座る）」
たか 「え？」
あい 「（無言）」

たか 「どうしたの？」
あい 「・・・そんなこと、はないでしょー」
たか 「は？」
あい 「分かんないのね、はいよー了解でーす」
たか 「え、何か、ごめんね」
あい 「私一生懸命作っただけどなー」
たか 「(黙る)」
あい 「黙らないでよ」
たか 「え、だって」
あい 「ごめんごめん、私が悪かった」
たか 「ええ」
あい 「たかちゃんはさ、」
たか 「？」
あい 「・・・たかちゃんはさ、強引だし女心分かんないし、あんまりモテなさそうだね」
たか 「は？そんなことないし、こう見えても東京じゃけっこうモテてたからね」
あい 「ほら、女心も空気も読めない」
たか 「~~~~~！」
あい 「はは、ごめんごめん、意地悪しちゃった」
たか 「・・・別に良いけど」
あい 「・・・怒った？」
たか 「怒ってないよ(適当に座る)」

間

たか 「あいちゃんさ」
あい 「んー？」
たか 「ずっとこの街にいるの？」
あい 「いや、ここに来たのは最近だなー」
たか 「そうなんだ。どこから？」
あい 「んー、ずっと遠いところ」
たか 「何それ」
あい 「いづれね」
たか 「初めて会ったとき、何で泣いてたの？」
あい 「あれ？言ってなかったっけ？」
たか 「うん、結局聞けてない」

あい 「・・・バイト先の店長にね、酷いことわれちゃったの。あ、すき家じゃないよ！別のところのね」
たか 「そっか」
あい 「最初は優しくたったんだけど・・・結局、みんな自分の世界観でしか人と喋れないんだよね」
たか 「どうゆうこと？」
あい 「ごめん、何でもない。」
たか 「そっか」
あい 「面倒くさいよね、人間って」
たか 「あんまり考えたことないや」
あい 「はは、そうゆうとこ、良いね」
たか 「俺は俺で悩みとか一応あるけどね」
あい 「世の中どこも大変だね。」
たか 「俺、あんまり未だあいちゃんのことよく知らないけど、悩みとか、辛いこととかあったら、ちゃんと言ってね」
あい 「そのうちね、色々もつと話そうね」
たか 「うん」

しばらく沈黙

♪ポチャン

あい 「あ、魚、今はねたよね？」
たか 「え、え、嘘、マジ？」
あい 「マジマジ・・・あ、ほらまた」
たか 「凄い目良くない？」
あい 「両目合わせて6くらいあるから」
たか 「ろくか・・・6!?マジで凄いね」
あい 「ははは、でしょ？何でも見えてるんだよー」
たか 「何かその言い方怖いなー」

二人、笑う。立ち上がる。

♪何かエモい音 『Blackbird』

たか 「夜のただっ広い海を見てるとき、吸い込まれたらどうしよう、って凄い怖くない？」
あい 「そうかな、それは見方次第じゃない？」

たか 「どゆこと？」

あい 「私はね、今幸せだから、魚が飛び跳ねたり、世の中の何でもかんでもが私たちのことを喜んでるみたいに見えるんだよ。」

たか 「随分ハッピーな脳内だね、羨ましいなあ」

あい 「ほら、また、女心と空気の読めないことを言うー」

たか 「ごめんごめん」

あい 「不安と焦燥感に囚われてるたかちゃんには、この真っ暗な海も恐ろしく見えるのかもしれないけど、少なくとも私には、今の私には、真っ暗でただっ広い海だって幸せの一つなんだよ。全部見方次第。たかちゃんもその気になれば見えるよ。」

たか 「全部見方次第ね。俺にも飛び跳ねる魚が見えたら良いけどね」

♪ポチャン

たか 「あ、あ！今、見えた！」

あい 「でしょ！」

たか 「う、うん、俺にも見えた！あ、また！」

魚の被り物をした人たちイン。何か適当に踊ったりしてる。

あい 「見ようと思えば何だってハッピーだよ。夜の海も、この街も。」

たか 「あいちゃんは凄いや、俺一人じゃこんなもの見れなかった。」

遅れてさかなクンがインして適当に魚と喋ってハケる（出オチ）

あい 「その気になればクジラだって見えるよ！」

たか 「クジラはさすがに見えないでしょう」

あい 「ほら！」

♪ぎっばーん

☀クジラのシルエット

うわーみたいな顔してる二人。

魚たちはクジラの流れが終わったらハケていく。一匹だけ残る。

たか 「あいちゃん、俺、今、多分、幸せなんだわ」

あい 「(照れる)」

たか 「ありがとうね」

あい 「チョコ、まだ材料は残ってるから、また作って次会った時絶対に渡すからね」

たか 「うん、分かった。楽しみにしてる。今日はどうする？」

あい 「家に帰るよ。送って」

たか 「じゃあ、行こっか」

あい 「うん」

二人手を繋いで手前ハケ。

♪FO

何故か一匹だけ残った魚は舞台前へ。客席を見渡す。しばらく沈黙。

☀スポット

魚 「どうも、魚です。さっきの二人のラプラプっぷりに付き合わされた魚です。いや、参っちゃいますよね、何か勝手にね、二人の幸せを喜んで跳ねてるみたいな捉えられ方されてもね。あれはね、体にくっついた寄生虫を取る為に跳んでるだけです。あ！勘違いしないで下さいね！わたくし、タチウオです。まあ、タチウオ程度の立場から言わせてもらおうとね、あの二人、直ぐ別れると思うんだよなあ。うん。今が一番楽しいってね、わたくし家内がいるんですが、昔は可愛かった。今はほら、一度に何百匹産むんだよ！怖いよ！ってね。ですからね、タチウオ程度の立場で言わせてもらおうと、あの二人が互いの違いをどこまで理解し合えるのか、ってところに掛かってますかね。」

♪携帯の鳴る音

魚 「あ、ちょっと失礼しますね。」

おもむろに被り物を脱いで捨て、電話に出る。

【6…愛と友情】

☀変化

水島 「もしもし、はいお世話になってますうー。はい、はい、あ、そうですね結局取り逃がしてえ、ええ、え？今から、お宅に？いや、あの、こんな時間ですけどご迷惑じゃないですか？や、別に嫌って訳じゃないですけど、何か、良くないかなーって。あ、家内も、お邪魔してる？お宅に？や、そんな来ないと帰

さないななんてそんな物騒なーやめて下さいよおちよっとお帰してあげて下さいよお、ええ、ええ、ええ、ええ、」

こうちん、ぼーちゃん、みほ、水島のセリフ中に奥イーン。周りに椅子を置き座る。

水島 「申し訳ございませんでしたっ!!」

こうち 「どうしよっかなあ、どうしようかねえ、どうしたら良いかな、みほちゃん、どうしたら良いと思う?」

みほ 「仕事の失敗は仕事で取り返すしかないわね。店長、もう一度チャンスをくれる?」

こうち 「だってさあ水島さん、どう思う?」

水島 「・・・もう一度、頑張ります」

こうち 「・・・いらないなあ、いらない。頑張るとかそうゆうの、一番いらないんだよねえ。一度ミスったら二度するよ?君たち。学習能力低そうだもんねえ。みほちゃん、自分でもそう思うでしょ?」

水島 「一応、漢検6級です!」

みほ 「そうだね。確かに私たちは学が無いわ。でもね、私たちには愛があるから、お互いの為に何でもやるってゆう覚悟と意地ならあるわ」

こうち 「だからそうゆう覚悟とか意地とか、いらないんだよね!俺が頼んだ、君ら出来なかった、そんだけ!女の子一人減っちゃって売り上げも減っちゃうんだよ分かるかな!ミスったら次、出来なかったら次、出来ることを考えなきゃ。なのにあんた、しばらく連絡寄越さなかったよね?何やってたの?」

水島 「はい、あの・・・魚に・・・」

こうち 「はあ?」

水島 「あ、すみません何でも無いです」

こうち 「まあ良いけど。で、どうすんの?減っちゃった分の女の子と、その売り上げ・・・」

二人 「自分たちで考えなきゃ!」

ぼー 「(電話)あ、もしもしたか、悪いね、今彼女と一緒に?もう解散した?お、オッケ、今こうちんと二人で飲んでるんだけどめっちゃ盛り上がってて、すげえ楽しいから、たかも来て一緒に飲み直そうよ。うん、超楽しいから、マジで。来る?よっしゃ絶対ね、うん、めっちゃ楽しいから、絶対来てね」

こうち 「何も出てこないねーやっぱ頭すっからかんだからかなあ!だよねえぼーちゃん!」

ぼー 「あ、俺は、いないものだと思って」

水島 「お言葉ですが!」

みほ 「あんた」

こうち 「何？」

水島 「お言葉ではあるんですが、我が家の経済は店長にどっぷり依存していますよ、僕の収入も雀の涙だし、店長に仕事貰ってなんとかで、正直生活は辛いです。でも、それなりに楽しくやっています。あんたさえいなければ。自分たちの幸せの為なら、他の人の幸せなんて関係ないと、そう思っただけで何年も無理な仕事をやってきたけど、もう限界です。」

こうち 「それも一つの選択だよ。偉い、よく言えました！みほちゃんももうお店来なくて良いよ」

みほ 「すみませんうちの主人が！ほら、一緒に謝って！」

水島 「やだ！」

みほ 「あんた！」

水島 「俺は、俺は自立する！一人でお前を養っていくから！」

みほ 「無理よあんた頭悪いんだから！」

こうち 「無理だなお前頭悪いから」

水島 「そ、そんな、ぬぬぬ！うううう！（言葉にならないやつ）」

ぼー 「無理そうだな」

みほ 「ああ!？」

ぼー 「あーごめん俺チャリ走してるだけ」

こうち 「そうか分かった、じゃあこうしよう！」

こうちん資料を取り出し二人の前に投げ捨てる。

みほ 「店長、これ、何ですか？」

こうち 「保険に入ろう、ジャストナウ。どうせ入ってないでしょ？入ってくれたら後は上手い事やってあげるから」

水島 「え？」

こうち 「大切なんですよ、奥さん。幸せになって欲しいんですよ？ほら、頭の悪い水島さんでも直ぐに、自分の力で稼げるよ！」

水島 「え、ええ、ええええ」

こうち 「急にやめられるとウチも困っちゃうし、あんたらけっこうミスも多いし、そこくつついちゃったの普通に風紀違反だし、違約金、けっこうあるんだよね。ここで辞めたら俺、店長から借金取りのお兄さんになっちゃうんだけど、良いですか？」

みほ 「やめませんから！ね、あんた！」

水島 「俺はやめる！やめてみほちゃんを幸せにする！」

こうち 「じゃあほら、入ろっか、ホケン。今直ぐ違約金払ってくれるなら良いけど、何百万あるかな？払える？」

水島 「う、うう、ううううう！」

みほ 「すみませんでした！ほんとに、ほんとに何でもやるんで！ここで働かせて下さい！」

こうち 「何でもって言ったね！減っちゃう売り上げ分、しばらく給料から引かせてもらうけど構わないね!？」

みほ 「はい！」

水島 「うううう！うううう！やだあああ！」

こうち 「じゃあ早く入って保険！」

水島 「でも死ぬのもやだあああ！」

みほ 「もうやめてよあんた！」

たか奥イン

たか 「お待たせ！飲み直そうぜ！」

たかししばらく状況を見る。

たか 「ねえ何か凄い修羅場なんだけど！聞いてないんだけど！」

ぼー 「わりわり」

たか 「思ってたのと180度別方面に盛り上がってんじゃんかよ！」

ぼー 「やーさすがにここに俺一人部外者がいんのも気まずいから、たか呼んじゃおつて」

たか 「呼んじゃお、じゃねーよすぐえ空気読めない感じで登場しちゃったじゃんか！」

こうち 「じゃあ俺、友達と飲みたいからさ、もう帰んなよ。」

たかぼー 「え」

こうち 「わりいわりい！ちょっと使えない部下イジメたところだったからさ！もう帰ってもらうから、気取り直して飲み直そう！」

たか 「え、良いの？」

こうち 「良いの良いの！もう奴ら無理だから、損失分は長年掛けて馬車馬の様に働いて返すしかないんだよー！」

ぼー 「何かそうゆう問題じゃなさそうだったけど」

こうち 「いやいや結局ね、最初に話したとこに戻るんだよ！この世の中が悪いの！だからこそ！みんなで頑張って変えていこう！」

たか 「そうだね、頑張ろう！」

ぼー 「あれ、もしかしていつの間にか巻き込まれてる？」

こうち 「じゃ、またね！お疲れ様ー！」

みほ 「店长！」

こうち 「お疲れ様ー！」

みほ、水島そそくさと奥ハケ。

たか 「・・・あ！」

二人 「？」

たか 「さっきの、俺の彼女を追い掛け回してた奴らじゃねーかな・・・」

こうち 「たかの新しい彼女って、もしかしてあいちゃんのこと？何だマジか！」

たか 「そうだよ！え!?どゆこと!？」

こうち 「大丈夫もう帰らせたから！でもたか、悪いことは言わん、やめとけあの女は。」

たか 「え、どゆこと、こうちん！」

こうち 「何だよそんなマジになんなよ！な！今日はほら、バンド再結成の前祝いなんだからさ」

ぼー 「ちゃんと言ってやれよ」

こうち 「ちゃんとも何も、やめとけて話！」

たか 「だから、何でやめとくんだよ！あいつら、お前何か知ってんだろ！」

こうち 「あいちゃんはさ！ウチで働いてたの、風俗で。だから病氣いっぱい持つてるかもね！」

たか 「え」

こうち 「あ！勘違いしないでね！ウチの店がほら、病氣の女の子雇ってますってことじゃないよ！みんな検査受けてもらってるよ！でもほら、隠しちゃうじゃん？困るんだよね！こっちはさ。だからって訳じゃないけど、安く働いてもらってたんだわ」

たか 「聞いてないよ俺そんなこと」

こうち 「嫌でしょそんなこと言うの！それでいきなりやめちゃったからさ、こっちだって困るじゃん？だからあくまで説得してもらおうと思ってあの二人に呼びに行

ってもらったの！何も聞いて無いんだね！たかお前やっぱ騙されてるんだよ！」

よ！」

たか 「・・・」

こうち 「ほら！言われたくなかったでしょ！だから嫌だったんだよねえ友達だからさ、

やっぱショック受けて欲しくないじゃん！」

ぼー 「だってさ、たか。」

たか 「・・・全部知らなかったな・・・」

こうち 「え!? たかさ、むしろあいちゃんの何を知ってるの!？」

たか 「俺は、確かに、最近付き合ったばかりだし、ナンパだし。よく分かってない・・・」

こうち 「でしょ!? 良いのそんなんで、たかならもつと良い子いると思うけどな! 少なくともあいちゃんよりは」

たか 「でも、彼女と一緒にいると、今まで見えてこなかったものが見えるっつうか」

こうち 「そんなのたかが恋に恋しちゃうだけだよ! 他の子でも一緒だって!」

たか 「ああ俺、恋に恋しちゃってるだけなのかなあ」

ぼー 「まあそれを決めるのはたかの勝手だけだし、何も知らないのは確かに良くないよ。たまたま言っていないんじゃないかって、言わないのなら何か理由があるかもね」

こうち 「お金が欲しいんじゃないかな、結局。ウチだってほら、お給料面が原因でやめちゃった訳だし。しょうがないじゃん不景気なんだからね! 結局ああゆう子はお金なんだよ!」

あいちゃん奥イン。平台上へ。手紙を書きだす。

☀変化

あい 「パパママへ。お元気にしていますか? 私が住むこの街は、今とっても寒いです。」

たか 「俺、あいちゃんのこと、やっぱり何も分かってないんだな」

あい 「ですが私には、一足先に春が来そうです。少し前にとっても素敵な出会いがありました。」

ぼー 「隠し事の多い女はモテるけどね」

こうち 「あの子はモテるだろうな! でも勘違いしちゃったのかね、ああゆう子から搾り取って回すところ回さないとき、世の中良くならないから!」

あい 「その人はこの街で唯一、私が泣いてる時に声をかけてくれました。今まで私が一人で泣いていても誰も知らない顔をするこの街で、私の涙を綺麗だと言ってくれました。」

たか 「綺麗だったあの涙も実はまがい物で、うるんだ瞳のその奥には、計算と汚い秘め事が張り巡らされていたんだね」

あいちゃん、たか、一瞬目が合う。あいちゃんは笑顔を向ける。たかの顔は曇っている。

こうち 「そうだよ！ああゆう血液型も分からんような女なんて所詮そんなもんさ！下剤入りのチョコ食わされて財布奪われてたかもよ！」

あい 「バレンタインの日、その人はとってもおいしい手作りのチョコをプレゼントしてくれました。本当は私がしなきゃなんだけど、うっかり先にやられてしまいました。そして私はその人のことが好きになりました。」

たか 「バレンタインの日、プレゼントしたチョコにはあったけの想いを込めたけど、俺のその想いは見事に過ちだったのかもしれない。秘めたる激情はロツクに！だろ？こうちん」

こうち 「お、良いねーアツいパトス持つてるね！捨てていった奴らの心に炎を！後からやってきて我が物顔する奴らに鉄槌を！アツい心に乗せて一緒に歌おうぜ！」

あい 「だから私は、もらったチョコよりもっとおいしいチョコを作ってあの人にお返しします。そんなこんなで、パパ、ママ、そっちも大変だと思うけど、はるか遠い所にいる私のことを応援してください。」

あいちゃん手紙を折り畳み奥ハケ。

ぼー 「イイねアツいね」

たか 「お前はどうすんだ」

ぼー 「・・・まあ、ほどほどにね、ほどほどに」

二人 「うえーい！」

こうち 「あ、ちょっと待ってね」

こうちん舞台の中からPCとサングラスを取り出す。

ぼー 「何？」

こうち 「我々の再結成を祝って、ユーチューバーこうちんのどすこいチャンネルでライブ配信しようと思います。」

たか 「フォロワー1万人でマジか」

ぼー 「ほんと何してんのか分かんねえなお前」

こうち 「死ぬ時に布団の上で後悔しない為にやりたいことは全部やる主義だから」

ぼー 「積極性の鬼だな」

たか 「何配信すんの？」

こうち 「(サングラスを掛ける)そりゃあライブセッションでしょ、ういーっす、どうもおーこうちんでえーす。」

こうち

「(関西弁) まあ今日はね、バンドをね、再結成するということになりました

ね、二人の昔ながらの友達にね、来てもらいまして、約10年振りにね、ぶちかましてやるということだね、はい、では二人、所定の位置について」

たか

「所定の位置!」

ぼー

「こいつの無理矢理さにも段々慣れてきた。ハイ準備おっけーよー」

こうち

「さすがぼーちゃん飲み込みが早い。おらたか早くしろよ!」

たか

「あ、はいはい、いやいやそんなこと言われても」

ぼー

「ドンビシビシダカダカシャンシャン」

たか

「飲み込み早いな!」

こうち

「えー僕らのバンドの目的はね、この街にかつての活気を取り戻すことです。捨てていった奴らの心に炎を!後からやってきて我が物顔する奴らに鉄槌を!一緒にこの街を盛り上げてくれる若者大歓迎でえーす。国籍問いません、なんちつて、じゃあいくよ!1234!」

♪『移民の唄』

三人何となくエア演奏をする(クオリティは求めない)

☀変化して暗転

【7…不条理教室】

暗転中に平台上に椅子4個と机1個を出す。

♪煽ってFO

河村、広祐、後関平台上横たわって板付き。

☀明転

河村 「ぬあー……、バイト……バイト行かなきゃ。」

河村机の方へ行く。

河村 「はい授業始めるよー!」

広祐 「先生こんにちは!」

美帆、水島イン。四人に座る。

みんな 「こんにちわ」

河村 「(無言でバッグから教科書などを机上に荒くだす) こんにちは」

後関 「え!何故か先生の機嫌が悪い!」

広祐 「やめろよ！」

美帆 「先生生理ですかー？」

河村 「おい水島！何消しゴム食ってんだお前！」

水島 「ふござー！」

後関 「何でそんなに機嫌が悪いんですか？」

河村 「・・・先生今日はやる気が出ない！」

みんな 「(ええーとかうわーとかぶーとか)」

河村 「あー！うるさい！うるさいんだよ！俺はね！小学生がキャンキャン騒いでんのが本当に嫌いなもの！二度と喋んな！」

みんな 「(ちよつと黙った後ええーとかうわーとか横暴だーとか)」

河村 「あー！黙れガキども！攫って北朝鮮に売るぞ！」

広祐 「先生！僕達は算数を教わりに来たんです！」

みんな 「(そうだそうだー！算数を教えろー！的なの)」

河村 「おい水島！お前消しゴムばっか食ってんじゃねえ！」

水島 「ふござー！」

河村 「先生はね！今日すこぶる機嫌が悪い！分かるか！」

美帆 「先生生理来たんですかー？」

河村 「(無言で美帆の首を絞める)」

みんな 「(ええーとかうわーとか暴力だーとか)」

河村、広祐に剥がされる。

河村 「俺はね！この時期になると必ずね！算数も国語も理科も社会もどうでも良くなるの！」

水島 「職務放棄だー！」

河村 「うるさい消しゴム食ってろ！」

水島 「えー！」

河村 「だから今日は先生好きな事を好きだけ喋ります！はい起立気を付け礼着席！」

後関 「で、先生今日は何を喋るんですか？」

美帆 「先生生理来たんですかー？」

水島 「消しゴムうめえ消しゴムうめえ」

広祐 「美帆ちゃん違うよ！生理は女の子しか来ないってママが言ったよ！」

みんな 「・・・」

広祐 「おい何で急に静かになるんだよ！」

河村

「イন্দだよ静かで！はい、加藤君がね！みんなを黙らせてくれたので先生やっぱ話を始めます！ロサンゼルスに！ざっと分けて三種類の人間がいました！何だか分かるか！」

後関

「はい！男と女と！」

河村

「違う！後から来て差別されてる奴らと、後から来て差別してる奴らと、ずっといて差別してる奴らだ！」

美帆

「先生！後関君が正面から全否定されて泣いてます！」

後関

「うう、やっぱりあの先生気が触れてるよお」

河村

「泣かせとけそんな芋坊主！はい今言った三つの奴ら！当然同じ街に住んでたらストレス溜まるよねお互いに！」

広祐

「はい！」

河村

「はいクソガキ2号！」

広祐

「事件が起きるんですね！」

河村

「君のような勘の良いガキは嫌いだよ！そうだよ起きますよ事件が！後から来て差別されてる奴らの少女が後から来て差別してる奴らの店に行きました！」

あいちゃん奥イン。キョロキョロしつつ舞台上のオレンジジュースを取り舞台前方へ。

河村

「特別その店は強盗とか万引きとか多かったので！店長は後から来て差別されてる奴のことを真っ先に疑いました！」

美帆

「あんたにくれてやるオレンジジュースはねえー！」

美帆平台から降りあいちゃんに掴みかかる。

あい

「え、何!？」

美帆

「万引きしようってんだろ！とぼけても無駄よ！」

あい

「違います！」

河村

「当然くっつかかれた方は抵抗しますね！はい、ドォーン！」

美帆、あいちゃんと揉み合いコケる。

あい

「(ジュースを舞台上のどこかに置き)ジュースは置いて行きますからね」

あいちゃん、ぐるっと回って奥ハケの方へ

河村

「でも差別してる方はこれでは怒りが収まり切りませんでした！」

美帆、起き上がり手前ハケから銃を取り出し構える。

●変化

河村 「バーン！てな具合に頭に一発ぶちかました訳でございますわ！」

美帆、あいちゃんを撃つ。あいちゃん撃たれたらその場で倒れる。

美帆は舞台上のみんなに混ざる。

広祐 「はい！」

河村 「またお前かクソガキ2号！」

広祐 「それでずっといて差別してる奴らが加害者の刑を軽くするんですね！」

河村 「お前ほんと勘が良いなぶつ殺すぞ！そうして軽い刑が下ったことで差別される奴らブチ切れ！ロサンゼルスは暴動の火に包まれることになりました！はい
質問！」

後関 「はい！」

河村 「はいクソガキ1号！」

後関 「これは一体、何の授業ですか？」

河村 「人間は過ちを何度でも繰り返しますという授業でした！ほら！また水島が消し
ゴム食ってる！」

みんな 「(ええーとかうわーとか横暴だーとか職務放棄だーとか権利の乱用だーとか消
しゴムくらい食わせろーとか死ねーとか大騒ぎ)」

河村 「うるさい！黙れええええ！お前らには分からんだろうがこの世は理不尽の連
続だー！その！無関係な理不尽の一例として！先生今から爆発します！」

河村、むぎぎぎとか言いながら自爆する前のやつ。美帆と水島、ワーワー言いながらハ
ケる。後関と広祐、河村の自爆をワーワー言いながら止めようとする。

♪爆発音

三人平台上に倒れる。

●平台上暗転

あいちゃん立ち上がる。

あい 「たかちゃん、たかちゃん」

たか 「あれ？どうしたの？」

あいちゃんたかの頭をなでる

たか 「さっきはごめんね、俺、あんまりこーゆう経験無いからさ、どうしたら良いのか分かんないんだ

あい 「知ってるよ」

たか 「うん」

あい 「私のこと、ちゃんと好き？」

たか 「好き・・・だと思う。」

あい 「どっちつかずだね。」

たか 「うるさいなあ」

あい 「チョコ、持っていくから」

たか 「え？」

あいちゃん手前ハケ

【8..恋する暴動】

☀再び平台上へ

三人 「うわあー！ー！」

たか 「・・・夢か」

ぼー 「何故俺はあのメンツに授業を」

こうち 「何やインザドリームや」

三人 「・・・」

三人 「(笑い合う)」

たか 「あれ？昨日結局どうしたっけ？」

こうち 「三人で久々にバンドやってライブ配信して」

ぼー 「視聴者めっちゃいて」

たか 「ネットで大反響で」

こうち 「前祝いだって浴びるほど酒飲んで」

ぼー 「そのまま寝て」

三人 「ぼーちゃん(俺)が爆発した！」

三人 「(笑い合う)」

ぼー 「やっぱ俺爆発してたよね？」

たか 「したした！」

こうち 「俺ら必死で抑えてんの」

ぼー 「何で俺自爆してんの」

たか 「知らんわ」

こうち 「みんな同じ夢見てたのかな」

たか 「そうなのかな！凄いな！」

ぼー 「いやー何か、久々に楽しかったわ」

二人 「(笑う)」

こうち 「ぼーちゃんに気が戻ったね」

たか 「完全にチャリ走廃人だったからね。俺も、この街で楽しくやっていけそうだよ」

こうち 「それは良かった、俺嬉しいよ」

ぼー 「何か照れ臭いな」

三人、照れ臭そうに笑い合う。

♪遠い爆発音

たか 「・・・え？」

ぼー 「マジで爆発？」

たか 「何々!!」

こうち 「お、俺、ちょっと外見て来るよ！」

二人 「うん」

こうちん奥ハケしようとする。みほ奥イン

みほ 「店長！」

こうち 「お、おお、どうしたのみほちゃん」

みほ 「今外に出たら危ないから！戸締りして中にいて！」

たか 「外はどうなってるんですか!？」

みほ 「分かんないけど、色んなところで燃えてて、色んな人が捕まって暴力受けてる、旦那とも一緒にいたんだけどはぐれちゃったから・・・」

たか 「え、どうしてそんなことに」

みほ 「分かんないよそんなの!・・・でも、不当労働許すまじってここにもみんな来てたから、外出ない方が良くわよ。・・・あんた、どこ行っちゃったのよ・・・」

こうち 「おいぼーちゃんお前こんな時にまでチャリ走かよ！」

ぼー 「暴動だよ、これ見てみ」

たかとこうちん、ぼーちゃんの携帯を見る。

ぼー 「理由は色々だろうけど、大勢集まって暴徒化してる」

たか 「そんないきなり」

ぼー 「ある過激なネット配信と、これ今朝の事件だな、ある女の子が言われなく殺されたって。片手にチョコを持っていったってさ」

たか 「チョコ？」

こうち 「え、で、何!?ウチの方がけて来てんの!？」

みほ 「多分、お店も燃えちゃってたし、標的の一つになってるかも」

こうち 「おいおい嘘だろうどうなってんだよ!ふざけんなよ!」

たか 「ごめん俺ちょっと電話してくる。奥の部屋借りるね」

たか手前ハケ、こうちんとみほはそれぞれうなだれてる。

ぼーちゃん置いてあるPCを見る。

ぼー 「確実に標的になってるね、ここ。昨夜の配信からお前のアカウント炎上してる

よ」

こうち 「・・・」

ぼー 「今も更新されてるよ」

こうち 「俺はただ、この街が良くなって欲しいだけなのに」

♪さつきより近付いた爆発音

ぼー 「とにかくさ、ここに居ても危ないだけだから、逃げるか隠れるかしないと、確

実に近づいて来てるから」

水島 「(幕裏から) 店長!開けて下さい店長!」

みほ 「・・・あんた!(奥ハケの方へ)」

こうち 「おい!開けんな!」

こうちんみほを力づくで連れ戻す。

みほ 「ちょっと店長!何でよ!」

こうち 「開けたら危ないだろ!」

みほ 「は!?じゃああの人どうすんのよ!ちょっとそのあんたも何か言ってよ!」

ぼー 「旦那さんが脅されてる可能性は?捕まって暴力受けて、俺たちを呼び出すよう

に言われてるかもしれない」

みほ 「そんな!そんなこと!」

♪さつきより近い爆発音

水島 「・・・店長、開けて下さい、店長(さつきより弱い)」

みほ 「あんた!!ちよっと!離してよ!」

こうち 「ダメだ開けたら!」

水島 「みほちゃん、みほちゃんいるのかい」

みほ 「あんた!あんた今開けるから!離して!」

こうち 「ダメだ!」

みほ 「離して!!」

水島 「みほちゃん、聞こえてるよ、こんなことになるなら、あの時保険に入っておけば良かったかなあ」

みほ 「何言ってるのよあんた!何でそんなこと言うのよ!」

水島 「ごめんねみほちゃん、俺頭悪いからさ、こんな時なんて言ったら良いのか分かんないんだ。」

みほ 「ねえあんた!脅されてる訳じゃないでしょ!あんた一人なんでしょ!?!」

水島 「ごめんねみほちゃん。(小さい)」

みほ 「え、あんた?」

沈黙

みほ、諦めへたり込む。

たか手前イン

たか 「ダメだ繋がんない・・・どうしよう。」

みほ 「あんたたちのせいよ。」

たか 「え?」

みほ 「あんたたち昨日おかしな配信したんでしょ。」

たか 「そんな、おかしな配信なんて、」

ぼー 「してたんだよ、俺たちから見たら正しい事をしたのかもしれないけど、他の人がおかしな配信だって捉えたらそれまでなんだよ」

たか 「俺はそんなつもり全く無かったよ!ぼーちゃんだってそうだろ!こうちんも!」

ぼー 「俺はね!俺らはね!でもそうゆうことじゃねーんだよ!」

たか 「こうちはどうなんだよ」

こうち 「俺はさー」

たか 「うん」

こうち 「俺はねえ、ここまででっつこう頑張って来たんだよねえ、必死で働いて店建ててこの街良くしようと思って。あんな奴らがそもそもいるのがおかしんだよ！俺はここまで頑張って来たのにさあ！」

たか 「こうちん」

みほ 「やっぱりあんたたちが悪いんじゃないの！」

たか 「そんな、こんなことになるなら俺はやらなかったのに」

ぼー 「そうだよお前のせいじゃないよ！だからもうダラダラしてる暇は無いですよ！」

こうち 「どっちつかずだったのはお前だよ」

ぼー 「こうちん！」

こうち 「最後までどっちつかずで、言われるがままやったの、たか、お前だよ」

たか 「何だよどっちつかずって・・・俺は、俺はただ、こうちんの言う様にこんな世の中嫌だから、てゆうかこのままの自分が嫌だから、だから一緒にロックやっただよ！そこに他の意味なんて無かったんだよ！だから、だから、結局、あーもう！誰に何言われても！俺はお前らのことは大事だし彼女も彼女で好きなんだよ！」

こうち 「それがどっちつかずなんだよ！」

たか 「そうだよ！何が悪いんだよ！俺はあいちゃんとはまだまだ一緒にいたいし、自分自分で変わりたいんだよ！楽しくなりたかったんだよ！隠し事があるなら言っただけで済んだよ！でも傷つけたくもなかったんだよ！そんでお前らとも一緒に何かして変えてやりたかったんだよ！」

♪窓が割れる音

ぼー 「もう分かったから、早く逃げよう！」

たか 「何か・・・何かもう分かんねー。何をどうしたら良いのか俺には分かんねー」

ぼー 「たか！」

♪ドアを叩く音

たか 「俺は・・・確かに・・・こうちんの言った様に自分でしたことだから・・・みんな、ごめんね！どっちつかずで！俺はここであいちゃんを待つ。そんでお前らとも一緒にいる。あいちゃんはきつと来てくれる。」

ぼー 「終わった」

みほ 「あんたあ」

こうち 「くそつくそっ」

たか 「あいちゃん・・・」

しばらくしたらドアを叩く音がやむ。

♪たかの携帯の鳴る音

たか、携帯を取る。

あい 「(幕裏か音響) 私、あいちゃん。今、あなたの直ぐそばにいるの。」

たか、ドアを開けにゆつくりと奥ハケへ。

☀変化 (ハケサスのな)

たか 「あいちゃん・・・あいちゃん？」

ふんどし姿の水島イン

水島 「やあみんな！びっくりした!？」

全員呆気にとられる。

途端、水島の背後よりあいちゃん奥イン。ピコピコハンマーで水島を殴りピース。

四人 「で、出たー!!」

♪『Sugartown』C1

☀変化

あいちゃんピコピコハンマーでぼーちゃん、みほ、水島、こうちんを追い掛け回し撃退。

(平台外をぐるぐる回るように追い掛け回す。みんな大騒ぎ。捕まえたらハンマーでタコ殴り)

最後にこうちんとは対峙し、平台上で相撲を取るがこうちんを簡単に吹っ飛ばす。

たか 「あいちゃん！」

あい 「会いたかった！」

二人 「・・・」

あい 「こうしてる時が一番幸せだなー」

たか 「ありがとう、来てくれて」

あい 「どういたしました」

間

たか 「どうしてこうなっちゃったのかな」

あい 「そんなこと言わないでよ」

たか 「ごめんね」

あい 「たかちゃんは優しいから、直ぐに謝っちゃうね」

たか 「褒められてんのかな」

あい 「褒めてるんだよ、分かんないかなあ」

たか 「ああ、ごめん、あ」

二人笑う

あい 「私、たかちゃんと一緒にいると楽しいな」

たか 「俺もだよ」

あい 「ほんとに？友達と一緒にいる時の方が楽しかったんじゃないの？」

たか 「まあ、それはそれ、これはこれ、俺はどっちも好きなの」

あい 「やっぱり女心の分かんないやつだね、たかちゃんは」

たか 「良いじゃん、別に」

あい 「たかちゃんのそうゆうところ、私は好きだよ」

たか 「うるさいよ」

あい 「ははは、照れないですよ。」

たか 「・・・結局、何が正しいんだろうね」

あい 「何が？」

たか 「俺はさ、欲張り過ぎたのかなーとか」

あい 「そんなことないでしょ」

たか 「でも、俺は、俺の事しか見えてなかったんだなーって、まあみんなそうなのだ

けど、ここまで来ちゃってから思うんだよね」

あい 「正しいとかそうゆうんじゃないだよ、きっと」

たか 「どうゆうこと？」

あい 「結局みんな、自分の世界が大事なんだよ、私が、ただたかちゃんに会ってチヨ

コを渡したかっただけのよ。みんながみんなのエゴイズムの結果なんだよ」

たか 「・・・俺さ、結局何も分かんないまま、ここまで、特に何も考えず、来るとこ

まで来ちゃって、もうこれからどうして良いのかとか、何も分かんないんだ。」

あい 「不安と焦燥感に囚われてるたかちゃんには、この状況は最悪かもしれないけど、少なくとも私には、今の幸せな私には、もっと違うものも見えるよ。来て、目を閉じて。」

あいちゃん、舞台上に行く。

たかは舞台上に行き目を閉じ、あいちゃんは目を閉じてるたかのくちにチョコを入れる。

●暗転

♪ 『Girls Almighty』 C1

●明転からクジラのシルエットへ

舞台上には楽しそうにバンドをやるこうちんとぼーちゃん、鞭で叩くみほ、叩かれる水島、楽しそうにチョコを食べさせてるあいちゃんと食べるたか。

●暗転

おわり